

映画「スコーピオ・ライジング」の作品分析

～1960年代アメリカン・ポピュラー・ミュージックとの関係を中心に

大阪芸術大学 映像学科 准教授 大橋 勝

アメリカの映画作家ケネス・アンガーの代表作であり、アンダーグラウンド・シネマのモニュメント的作品である『スコーピオ・ライジング(起き上がる蠍)』(1963)の作品分析を行なった。特にサウンドトラックに選曲されている、当時のヒットナンバーとの関係に着目し、作品の新たな解釈を試みる。

ケネス・アンガー/Kenneth Anger(1927-2023、アメリカの映画作家)は、アンダーグラウンド・シネマの代表的作家であり、その制作スタイルはアメリカン・ニューシネマ(ニュー・ハリウッド)の原型であり、現代のクイア・シネマの先駆と位置づけることができる。彼はハリウッドの撮影所で働いていた祖母の影響により、幼少時より映画に慣れ親しんでおり、また少年時代のSF趣味から、精神世界やオカルトへと傾倒していく。特にアレクスター・クロウリー(1875-1947、イギリスのオカルティスト)に感化され、セラマ思想を信奉するようになる。こうしたアンガーの思想及び文化的背景は、彼の映画作品に現れており、代表作『スコーピオ・ライジング』においてもそれは顕著である。

この文脈とともに、一見無造作に選曲されているように見えるサウンドトラックと映画の内容との関連を考察した。使用されている13曲は、映画制作当時(1963年)のヒットチャートにランクされていた曲であり、映画の全編にわたってBGM的に絶え間なく流れていく。セリフの一切無い本作において、これらの歌詞が言語的メッセージとして機能している。死の欲動、悪魔崇拝を背景としながら、この映画が観るものにポップな印象を与えるのはこの選曲が大いに関係しているが、これらは単なるバック・グラウンド・ミュージックではなく、作品の意味そのものを支える言語的メッセージとしても機能しているのである。

『スコーピオ・ライジング』のサウンドトラックに使用されている曲は以下13曲である。

- リッキー・ネルソン「フールズ・ラッシュ・イン」(1963)
- ベギー・マーチ「ゼンマイ人形」(1963)
- エンジェルズ「あたしのボーイフレンド」(1963)
- ボビー・ヴィントン「ブルー・ヴェルヴェット」(1963)
- エルヴィス・プレスリー「悪魔の化身」(1963)
- レイ・チャールズ「旅立てジャック」(1961)
- マーサ&ザ・ヴァンデラス「熱波」(1963)
- クリスタルズ「彼は不良」(1962)
- クラウディン・クラーク「パーティ・ライト」(1962)
- クリス・ジェンセン「拷問」(1962)
- ジーン・マクダニエルズ「もう戻れない」(1962)
- ベギー・マーチ「彼について行く」(1963)
- サーファリス「ワイプ・アウト」(1963)

アンガーはドキュメンタリー映画『アンガー・ミー』(2006年、エリオ・ジェルミーニ監督、日本での公開は2021年)

のインタビューで、『スコーピオ・ライジング』におけるポピュラー・ミュージックの使用について、“a kind of ironic commentary to the visual(映像に対する皮肉な解説)”と語っている。

導入部の曲はリッキー・ネルソン・ヴァージョンの「フールズ・ラッシュ・イン」(1963)。原題 *Fools Rush In (where angels Fear to Tread)* は直訳すると「愚か者は飛び込む(天使も恐れる処へ)」だが、これは一種の諺で、「盲、蛇に怖じず」と「君子危うきに近寄らず」の意味を合わせもった慣用句である。愚か者は後先考えずに危険に飛び込むが、恋とはそのようなもの。本来は恋についての歌であるが、この映画ではオートバイと危険にのめり込むバイカーの行動を比喩的に表している。男性歌手による軽快な歌声に合わせて、青年がバイクを組み立てている。ガレージに転がるブーツ、工具、オートバイのパーツ。光り輝くバイク。ゆっくりと立ち上がる男のレザーのジャケットに鋳で書かれた文字“SCORPIO RISING”と“KENNETH ANGER”が示されてこの曲は終わる。

2曲目はリトル・ペギー・マーチの「ゼンマイ人形」(1963)。1曲目よりややスローテンポのガールズ・ポップ。思春期の少女が自分をゼンマイ人形になぞられてつづる恋の歌である。ここではブリキ製ゼンマイおもちゃのオートバイで遊ぶ幼児と、バイクのパーツを組み立てる青年が対比される。バイカーのコスプレをした幼児がおもちゃで遊ぶ様子は、そのまま青年の姿に移行する。子供の愛着と青年のフェティシズムが交差する。

最後の曲はサーファリスの「ワイプ・アウト」(1963)。この曲は冒頭に甲高い笑い声と“wipe out”というセリフが入る以外はインストルメンタルの曲である。サーフィンがテーマにしたいわゆるサーフ・ミュージックであり、題名の「ワイプ・アウト」は「一掃」や「絶滅」を意味する語であるが、サーフィンでは「転倒」や「(意図に反してボードから)落ちる」ことを指す、場面はオートレースに突入し、スピード感溢れるギター演奏音に追われるように加速していくが、転倒事故によって唐突に終わりを迎える。救急車のサイレント赤色灯。恐らく死亡したであろう青年の姿。曲の題名が示す通りのアクシデントが死への衝動を成就し、映画も終わる。

『スコーピオ・ライジング』において、歌詞の意味や曲の世界観が、映画の意味内容を部分的に担っていることが確認できた。そのあり方は決して説明的ではなく、映像との対位法的関係により、シーンごと、曲ごとに変奏を奏でている。そしてそのことがこの作品の豊かさを支えているのである。

主要参考文献

Anger: The Unauthorized Biography of Kenneth Anger, Bill Landis, 1995, HarperCollins